

マイケル・J・サンデル著『公共哲学』（鬼澤忍訳、2011年）筑摩書房 [Michael J. Sandel. (2005). *Public philosophy: Essays on morality in politics*. Cambridge, MA: Harvard University Press.]

## 書評

### Book Review

日本語で刊行されているサンデルの著書の分類方法は、いくつかあるだろう。敢えて2つに分類してみれば、「公共・政治哲学系」と「事例問答集系」の系統に分けられるのではないか。前者には、「リベラリズムと正義の限界」（2009）「民主制の不満」（2009, 2011）で展開されたようなサンデルの持論とそれに対峙する政治哲学の検証を中心に著書が展開され、私のような専門家でない読み手には負荷のかかる内容である。それに対し後者は、NHKの番組「ハーバード白熱教室」や、著書「これからの『正義』の話しよう」（2010）「完全な人間を目指さなくても良い理由」（2010）「それをお金で買いますか」（2012）を含み、身近な事例を哲学上多面的に検討する系統であり、専門家でなくても読みやすい。本書は、その両系統の側面を備えている。その理由は、本書が、1983年から2004年にかけて評論誌や学術雑誌にサンデルが発表した論文30本をまとめたエッセー集であり、上記著書の刊行と並行しているからである。よって、複数のサンデルの著書を読んだ後に本書を読めば、どの著書に発展された論点であるのか頭の中で連動させることができ、理解が深まる。即ち、本書を読むと、サンデルの他の著書についての自分の理解を再確認しながら、だけれども新たな理解を深めつつ、他の著書に見られない追加の思考や表現の変化を探しながら読むことができる。

恒例となった中部支部の書評欄ですが、今回は7本用意しました。これまでの「リベラリズムとコミュニケーション学との接点を探る」という企画も裏テーマとしてありますが、幅広く多くの作品を網羅してゆきたいと思います。研究書であれば何でも大丈夫ですので、今後もよろしくお願ひします。

今回の書評欄の締め切りは、2014年1月末日です。原稿の長さは特に指定しませんが、A4で2ページ程度にまとめていただければ助かります（これよりも長くても構いません）。原稿の送付先は以下の通りです。

fujimaki(ここにアットマークを入れてください)u-shizuoka-ken.ac.jp

藤巻光浩（ニューズレター編集委員）

本書は、3部で構成されている。第1部には「公共・政治哲学系」のエッセーが7本収録され、主に「リベラリズムと正義の限界」（2009）「民主制の不満」（2009, 2011）で展開された主要な議論についての論文である。ロールズの「正の善に対する優先」や「負荷なき自我」への批判を中心に議論が展開され、熟議を通してコミュニティの「善」を議論し、公共の活動に参加する行為を通じて市民性を育むこ

と、これまでの政治経済の変遷や、政治への満足度や寛容の関わりなどを論じている。第2部には、「事例問答集系」のエッセーが14本収録されており、州営宝くじの是非やスポーツとアイデンティティ、汚染権の売買について、胚の利用に関する倫理学など、これまでの著書にも含まれている事例が哲学上多面的に検討されている。第3部は、先の2つの部とは異なり、様々なリベラリズムの論者やそれに対峙する論者の議論、ロールズ、デューイやウォルツァーなどについてのエッセーが9本収録されている。第1部と重なる部分も章によってはみられるが、「リベラリズムと正義の限界」(2009)では「相互の無関心」(“mutual disinterest”)と言う表現で展開されていた議論が、本著では「相互尊重」(“mutual respect”)と反転した表現が使用されており、新たな視点で読むことができ、異を唱える者とも関わりを求めるサンデルの考えが垣間見えて興味深い。

今回の書評では、過去2回のサンデルの著書への書評との内容的な繰り返しを避けるため、サンデルの議論とコミュニケーションとの絡みについて2点を取り上げることとする。1点目は「場」についてであり、2点目は「相互尊重」についてである。

まず、市民が参画する「場」に関するサンデルの考察についてである。レトリックの先生方から昨年度の支部パネルでも質問・コメントを受けたが、「場」の捉え方は分野や文献により、多様であるようだ。サンデルの考える「場」は何を指し、どのような機能を備えているべきなのか。参考にした箇所は、共和政治が市民性を培うべきだというある種の強制力を持っているのではという批判に対するサンデルの見解についてと(42頁以降)、経済がグローバル化した現代社会における道徳と市民の政治参加についての位置づけ(52頁以降)に関する記述である。サンデルは、主権は多様なコミュニティや政治団体に上下に多様に分散されているのがよく、各自が各自のコミットメントのある多様な場で参画すれば良いと考えている。その理由として、そのような多様で分散された場に参加することで、「善」が一義的でなく、

また相手だけでなく、自分自身も所属するコミュニティの数に応じて多様な善を含む存在であることを認識することができるからだ。時には自身の抱える善や責務同士が矛盾し、葛藤する場合もあるという。ただ、自己内と、そして相手との矛盾や葛藤を調整し、決定し、行動を起こしていく過程で生きる能力や調整力が高まるのだと言う。その能力や力をはぐくむためにも、多様なコミュニティや団体である「場」に出て活動すべきであるとサンデルは考えている。サンデルの考える「場」の全てが等しく政治的影響力を持っているとは言い難いが、サンデルは参加により市民性をはぐくみ、自他の多様性を調整できるようになる鍛錬の機能を、多様な「場」に求めていることがわかる。

2点目は、「相互尊重」(364頁, “mutual respect”)についてである。この言葉の意味について、リベラル派の用法とサンデル自身の用法の違いをサンデルは説明している。リベラル派にとっては、折り合いのつかない道徳的・宗教的な価値観は、議論を行わずに、紛糾しないよう触れずにそっとしておくことで相手の善を尊重し、そして相互尊重を達成しようとしている。即ち、相手に関わらないことで、相手にも干渉させないことで達成するというのだ。この考え方は、個がそれぞれ合理的に正しいことを判断できるというカント的な人間観に深く根ざしている。逆に、サンデルは、「熟議型の考え方」(364頁、原文“deliberate conception,” pp. 246-247)を提示し、関わりあい、議論し、必要があれば批判もし、互いに聞き・学び合うことから、「相互尊重」が達成できるという。話し合ったところで、意見の不一致が解消されないこともあるし、逆に自分の考え方が変わることもある点も踏まえ(353頁)、それでも関わることで、市民性がはぐくまれ、自己内の矛盾や葛藤に対峙し、相手を尊重することが学べるのだという。同じ章の違う箇所でも、原理と考え抜かれた判断を繰り返すことにより、正しい議論が判るというロールズの「内省的均衡」(348頁)にサンデル自身の議論を重ね、振り返りや検証の重要性を提示している。コミュニ

ケーションを通して他者との関わりを重視した論考が第 28 章では展開されている。リベラル派もサンデルも両方米国文化に根ざしているが、話すこと・尊重することについて間逆の考え方で哲学の議論を構成しているのが興味深い。

話しても解り合えないかもしれないが、話してみないとわからないという観点は、多くのコミュニケーション研究者が共有できるのではないだろうか。

今後は、サンデルが力の格差についてどのように考え、対峙しようとしているのか読みとってみたい。

福本 明子（愛知淑徳大学教員）

ロベルト エスポジト著 『政治の理論と歴史の理論—マキアヴェリとヴィーコ』（堺慎介訳 1986 年）芸立出版 [Roberto Esposito ,(1980) *La politica e la storia. Machiavelli e Vico Liguori*]

ロベルト・エスポジトは、現代イタリア思想家として、近年日本では、いくつかの貴重な翻訳と一緒に紹介されてきたが、その現在の功績の前に、彼がルネッサンス期のイタリアの歴史家、政治家であるニコロ・マキアヴェリの研究をしていた過去があり、それと共に、バロック時代の歴史家、修辞学者、法学者である JB ヴィーコとの関係においてこの書籍が書かれたことは、あまり取り沙汰されてはいない（翻訳された 1980 年代は注目を浴びてはいたが、その後の文献として見ることは少なかった）。原著の訳者である、イタリア法学、反ファシズム研究を専門とされていた堺慎介氏による紹介は、両者に共通するレトリカとしてというよりも、ヴィーコ研究の方向へ進んでいった形に近い。また、そのマキアヴェリとヴィーコのレトリック的共通項から見てとれる感覚については、日本のコミュニケーション学の、特にレトリックという分野の中でもあまり重要視されてはいないことも事実であるだろう。

もともと、エスポジト自身がこの書籍の〈日本語版での序文〉において、原著が未完結である数々の点をホップズへの展開へ進んでいく関係性として述べているように、この著作以降のエスポジトの研究は、ヴィーコからホップズへと転換がなされており、そこからの視点では、リベラリズムやファシズム的な視点で政治学や歴史学と彼のイタリア思想での理論とは繋がってはいくが、コミュニケーション学として、この二人を結びつけることは困難であるだろう。論者自身もそう述べて提起しているように、様々な困難という問題を提示していながらも、まだ深く読み取れる二人の関係の可能性を残しているテキストが、この埋もれた労作『政治の理論と歴史の理論—マキアヴェリとヴィーコ』なのである。

マキアヴェリとヴィーコについての関係性は、こ

れまで論文としてクローチェやホルクハイマー等に論じられてはいるが、エスポジトは彼らについても述べながら、現代的な意義を困難ながらも抽象的に見出そうとしている。その困難は、当時の議論として起こったニーチェのニヒリズムやヴィトゲンシュタインの言語論的転回というような〈理性の危機〉という状態において読み取れる、近代的理性の文化的分割としての2つのモデルの成り立ちから始まっており、ひとつは、近代的な思想、ホップズから成る人工的モデル、即ち『リヴァイアサン』である。それに対して、エスポジトがその本書で述べるのは、前-近代的であり、かつ反-近代的の、アリストテレスから成るマキアヴェリとヴィーコの自然的モデル（エスポジトは、自然を偶然や必然といった可能性を超えた人間の欲望の部分としての権力=知と読み解く）である。その対立から本書は始まっている。そのような反-近代の中で、反マキアヴェリ主義を行うヴィーコと、そのマキアヴェリから両者の可能性を探るといのがエスポジトの狙いである。

そのような狙いにおいて、取り上げられているテクストは、第一章、マキアヴェリの『リヴィウス論』第二章『君主論』と第三章では、ヴィーコの『講演』『理性について』『最古の知について』と、それらの読み繋ぎが行われている。最後の四章では、『新しい科学』からヴィーコ、マキアヴェリの歴史観についてキーワードを照らして両者を総じて論じようとする。まず、第一章の『リヴィウス論』からは、後の著作『君主論』とは対となる、共和主義者であったころのマキアヴェリの共和制ローマ及び、ギリシア、スパルタにおける〈秩序〉を基に書かれていた〈歴史〉が読み解かれている。そこに含まれる〈権力〉と〈欲望〉の関係を考察し、それらを持つ〈人間〉の〈イデオロギー〉の構造を認識論的などのレベルから、その時代の宗教的な規模まで読み繰り広げていくのである。次の二章『君主論』の読みからは、前章の『リヴィウス論』での取り組み方とは大きく変わって、共時的であり、水平的な歴史的視点が加わった、これまでの共和主義者的な垂直性とは対峙

的な視点の読みを加えていく。〈主体〉と〈権力〉の限界としての〈死〉や〈知〉といった〈(歴史的)不可能性〉に向き合った、そのテクストの外に向けた強烈で加速的な〈リアリズム〉な表現が浮かび上がるのだとエスポジトは論じている。三章のヴィーコについては、解釈学で有名な H・G ガダマーへの繋がりから始まり、〈共通感覚〉や〈フロネシス〉と〈ソフィア〉の関連性について述べられ、単なる脱クローチェ的な読みだけではなく、科学と歴史の関係性や〈解釈学的〉観点をイデオロギーの繋がりを〈真理(光)行為〉といったような二面性から議論していく。そして最後の章では、ヴィーコの〈主体〉〈権力〉〈知〉の問題について触れ、それがマキアヴェリーホップズとの差異や人文主義的なものでもないもう一つのヴィーコの読み、マキアヴェリとの繋がりを見つけていこうとするのである。簡素ではあるが、このような構成が本書の流れである。

はじめに述べたように、本書を読んでいて困難だと感じるのは、(訳者の堺氏による、敢えて行ったという文献以外の注釈の削除による専門的精読を強いることもさることながら) マキアヴェリとヴィーコの両者を対立させながら繋ごうという試み自体にその困難さが現れるからである。片方は、政治哲学としての著名人、もう片方は歴史学の著名人である。エスポジト自身も本著の中で、「マキアヴェリとヴィーコの分析が深くなればなるほど、とりわけ、継続的な研究の中で二人の時間的円弧が、(中略)両者を編年的に媒介する思想家・問題性・著作で埋めつくされれば埋めつくされるほど、それらの研究に最大限の生産性を与えるための新しい問題域が、ますます強く要求されるようになってきた」(p5) と言っているように、その二人の差異は「学」としての領域をもっても分かれており、その専門性も深まってしまっているため、両者の共通点を接合するためのスタンツァが無いのである。ただ、政治と歴史という、この2つのキーテーマを繋ぐことは、そう簡単なことではないのだが、また不可能なほど難しくもない。歴史と政治というこの両者を修辞学(レトリック学)

と読み替えてみると、その異なる2つの理念は、一つに統合され得るからである。もともと修辞学とは、自由七学芸の三学として続べていたのであり、少なくともマキアヴェリとヴィーコの両者の時代には、この修辞学は「学」として生きていたのであり、その学問からの視点が、エスポジトからは見過ごされているのである。本書では、その修辞学的で審級的な視点の位置が、現代的な位置によって組み込まれてしまっているため、たとえ〈知〉や〈権力〉〈主体〉〈イデオロギー〉といった新しい視点を持って繋げることによっても、エスポジトにとっては、限界として行き詰まったのかもしれない。ただ、その組み込まれて埋まってしまっている「学」の主体を見ることは可能である。たとえば、ジュリアーノ（ジュリアーノ・クリフォ 1998「ヴィーコ、修辞学とローマ法」『法政研究』55）の持つ視点のようにしていくことは可能ではないだろうか。ジュリアーノは、ヴィーコの権威的研究者であるクローチェ等により見捨てられたヴィーコの講義録『修辞学講義』において、それが単なるアリストテレス、キケロ、クインティリアヌスの伝統を准えるだけの講義ではなく、彼独自の新たな修辞学の試みが『新しい学』と関連して見言い出せると論じている。それと同様に、エスポジトの移行してしまった本著の研究も、レトリック学的キータームとして述べられた〈知〉〈権力〉〈イデオロギー〉といった言葉からマキアヴェリとヴィーコにおける分析の組み換え可能となると考えるのである。そのジュリアーノのように敢えて軽視されていた伝統を、パズルやだまし絵のように、組み替えたり、デフラグを加える事で、この著作はまた一段と面白い読み込みが可能となるだろう。

松林邦夫

(エリザベス・サンダース・ホーム 職員)

ブルーマー・H 著『シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法』（後藤将之訳、1991年）勁草書房 [Blummer, H. (1969). *Symbolic interactionism : perspective and method*. Englewood Cliffs, N. J. : Prince-Hall].

シンボリック相互作用論においては、何よりもまず、「言葉」を中心とするシンボルを媒介として人間の相互行為に焦点をおいて研究を行い、そしてそこにおける人間の「解釈」過程に着目し、それに基づく人間の主体的な在り方を明らかにしようとする（船津, 1989, 12頁）。この説明において重要なキータームとなるのは「解釈」と「主体的」という表現である。人間は「解釈」を通じて「自己」を対象化し、その対象化のプロセスにおいて「自己」との主体的な関わりを持つのである。

シンボリック相互作用論における3つの前提に関して船津（1989）は以下の様に挙げている。人間は一定の「意味」（meaning）に基づいて行動する。また「意味」は社会的相互過程のうちにおいて生じる。そして、そのような「意味」が人間によって解釈される（13頁）。つまり、人間は社会的相互過程において生じる「意味」に基づいて行動し、その「解釈」を通じて「自己」を自分自身の行為にとっての対象とすることが出来るのである。

ブルーマーは自我を持つ存在としての人間に関心を寄せ、人間は「自分自身との相互作用」（self interaction）を行うことによって他者の期待が「表示」（indicate）され、その表示された期待に対して「解釈」（interpretation）が為されることにより、自己の置かれた位置や行為の方向に照らし合わせながら、人間はその他者の期待を修正・変更・再構成の過程を経つつ主体的な存在となり得ることを明らかにした（船津, 1989, 13頁）。先にも述べたが、シンボリック相互作用論において、人間の社会的相互作用は言葉を中心とするシンボルを通じての行為のやり取りとして考えられている。人間はシンボル動物として、シンボルを用いての他者との関わりを経験し、そこで用

いられるシンボルによって他者に一定の反応を引き起こさせるとともに、自己のうちにも同一の反応を引き起こさせる。この「意味のあるシンボル」によって、他者と自己の内に同一の反応が生起し、相互理解と共有意味世界の形成が可能となる(船津, 1989, 212 頁)。

ミードは他者に対して指示を行い、また他者の指示を解釈する生命体として人間が認識を持つことが出来るのは、「自己 (self)」を持つことによって可能であると考えている。つまり、ここで彼が意味するのは、「人間は自分自身の行為にとっての対象となりうる」ということである(ブルーマー, 1991, 15 頁)。そして、人間は自分にとって自分がどの様な対象であるかということに基づいて、つまりはひとつの対象としての自分自身という考え方に立脚して、自分自身に対して行為し、また他者に対する自分の行為を導いていくと考えられている。

ミードは「役割取得 role-taking」についての考察を行う中で、この様な自分自身を対象化するプロセスで生じる、人間が自己・他者に対して見せる行為が如何にして導かれていくのかについてのメカニズムについて説明をしている。彼の説明によれば、個人が自分自身を対象とするためには、彼女/彼は自分自身を外部から見なくてはならない。このことは自分自身を他者の位置に置き、そして自分自身を眺めること、つまりその位置から自分自身に対して行為するということによってのみ行われうるものである(ブルーマー, 1991, 15 頁) ことを意味する。個人が取得する役割について、ミードは「遊戯の段階 (play-stage)」において得られる個人の役割と「ゲームの段階 (game-stage)」を経て取得される「一般化された他者 (generalized other)」の3つの段階に区別して捉えている。またこの様な役割を取得するにあたって重要と考えられる点は、個人がそうした役割取得の過程においては「自分自身に対して話かける」、または「近づいていくような位置にいる」ことであるとしている。

人間が自己を持つということは、個人にとって自

分自身との相互作用を可能にすることを意味し、そうして自分自身を対象化し話しかける、それに応答するというコミュニケーションの形式がそこには生まれる。この様な自己との相互作用は自分自身に対して指示を行う過程であると捉えることも出来る。この様な自分自身に対して指示を行うという社会的な過程を通して、個人は自分自身と相互作用する生命体としての人間を認識することになる。シンボリック相互作用論における人間観では、人間は「社会的」であるとみなされる。つまり、このことが意味するのは、人間は自分自身に対して指示を行う存在として位置づけられ、そういう指示に対して反応することによって、自分自身との社会的相互作用に関わる生命体という意味で、個人は社会的であるとみなされるということである。人間は作用してくる各種の要因に単に反応するだけの生命体ではなく、自分が気づいたものごとを処理しなくてはならない生命体としてみなされる。そして、この生命体は、自分が気づいたものごとを、自己指示の過程に関わることによって扱う、つまり、自分が気づいたものごとを対象とし、意味を与え、その意味を自分の行為を方向づけるために使用するという、自己指示の過程に関わるものとして捉える(ブルーマー, 1991, 18 頁)。

この様なシンボリック相互作用論における人間観は、社会学におけるそれとは様相を異にしている。社会学においては、人間の社会は自己を持つ諸個人から構成されるものとして認識されるが、個人が自己を対象化して存在するという在り方で扱われることは滅多にない。つまり、人間は何らかの組織を持った単なる生命体に過ぎず、作用してくる様々な方に反応するものとして仮定するのが、社会学が採用するパースペクティブである。人間は諸力 - 社会システム・社会構造・文化・地位上の位置・社会的役割・慣習・制度・集合表象・社会状況・社会規範・価値など、これら諸要因や諸力によって構成される社会構造の中にあるものとして捉えられ、人間はこういう要因が作用する為の媒介としての扱いを受け

る。そして、人間の社会的行為は、このような要因の表現であるとみなされる。こうした社会学のアプローチ・視点からでは、人間は自己を持つということ、つまり人間は自分自身にものごとを指示することによって行為するということ - 人間は自分自身にものごとを指示することによって行為するということ - は否定されるか少なくとも無視されており、社会を構成する諸個人が自己を持つということは認めていない（ブルーマー, 1991, 107-108 頁）。

<引用文献>

船津衛 (1989). 『ミード自我論の研究』 恒星社厚生閣.

中山佑介 (立教大学院生)

安田浩一著『ネットと愛国-在特会の「闇」を追いかけて』 2012 年, 講談社.

「ネット右翼」とは、国粹主義的な反韓・反中感情を持ち、「日本人」として「あるべき権利の保持」と「権力による問題の周知化」の遂行を目指した、オンラインコミュニティにおける保守イデオロギー傾倒の総体を指す名称である。このような不明瞭な定義になるのは、オンラインにおける現象を指示するためには止むを得ない。というのも、彼ら(この「彼ら」という言葉も、同「現象」を指すのに相応しい代名詞ではないかもしれないが)は中心的な過激派組織・団体に先導された運動ではなく、あくまでネット上に不特定で存在する匿名の「ネット民」からなるコミュニティが、集団アイデンティティとして保持している排他的ナショナリズム傾倒という概念的な存在として確認されるに留まってきたからだ。

フリージャーナリストである安田によって書かれた本書は、このようなオンラインにおける右翼的傾向に対し、自称保守系市民団体「在特会」に焦点を当てながら、現実社会における現象分析的視点からオンライン上での極性的ナショナリズムの実像解明を目指したルポタージュである。感情的な「愛国心」を顕著に表面化させた形で行われる彼らの「市民運動」がターゲットとするのは、第二次世界大戦後の補償を理由に不当な「特権」を受けながら日本に「寄生」し続けている在日中国・韓国人である。在特会によれば、彼ら「在日」は戦争時における日本軍による残虐な歴史を不当にでっち上げ、日本国による補償を要求して優遇の特権をなお享受し続ける「特権階級」であり、在特会は「被害者」としての日本人を代表した立場から在日による「悪事」の周知とそれと結びつくマスコミ・左派政権の糾弾を目指し路上デモ活動を全国各地で行う。オンラインで呼びかけられた自称「一般市民」によって画策・組織された運動という側面だけを見れば、アラブ圏を中心とした先の「ジャスミン革命」、及び米国ニューヨークを起点として世界的な広がりを見せる Occupy

Wall Street(ウォール街を占拠せよ)といった社会運動との共通性を想起させる。しかし、在特会の運動は極性化した国粹主義を根底に持ちつつ、それを「一般市民」という集団アイデンティティと「不当権力の淘汰」という大義名分の元に正当化しているという点において特殊である。実際、在特会は自らを右翼と自称せず、むしろそのように呼称される事を極端に嫌う傾向にある(246頁)。あくまでオンラインコミュニティの「一般市民」自発的に集まり、「日本人」の解放を目指した「正義」の活動を担う立場であると自負しており、「権力者」である在日・マスコミ・左派団体を糾弾するための「表現の自由」であれば、民族主義的な言動すらも認可されると考えている。実際、彼らが自らの愛国主義的イデオロギーに基づく運動を、「権力者」に対抗するレジスタンスとしての「階級闘争」であると自称している点は興味深い(54頁)。一方で、彼らのイデオロギーと対立する者や意見と直面した場合、それらは愛国運動に反対する「売国奴」か、あるいは「在日」であると一義的に判断される(192頁)。これらの際立った排他的イデオロギーは、Sunstein(2009)が危惧したオンラインにおける集団極性化(group polarization)を見事に体現しているものと言えるだろう。在特会の活動は、オンラインに置ける極性化したイデオロギーが「市民活動」という形で現実社会に表面化した社会的現象として、注目に値する。これほどまでにナショナリズムが顕在化した運動は、中国における尖閣諸島を巡っての「反日デモ」を置いて類を見ないだろう(中国での反日運動もまた、俗説的にオンラインによって呼びかけられたものであるという点は興味深い)。

今までこのような現象に関しては、オンラインコミュニティ間ではその存在が既に広く認知されていたものの、一般的には認知されているとはいえず、従って問題化される事はなかった。ある意味で日本社会におけるタブーとも言える戦後の民族間問題に躊躇なく入り込むネット右翼は、世間的な表面化を望まれる存在では無かったのかもしれない。しかし、

本書はそのような実態をあえて取り上げつつ、オンラインにおける排他的国粹主義を「現実社会」に引き戻し、議論として取り上げている。かつてはオンラインという「狭い」コミュニティの政治的趣向に留まっていた右傾化傾向も、近年ではその存在が国内外の政治的な場で公式に引用され、今年の「流行語大賞」としてネット右翼の略称である「ネトウヨ」という単語が候補として挙がる程までに、一般的な認知が進み始めている。その意味でも、本著が出版物として同問題の事実化に対して果たす社会的貢献は大きいと言えるだろう。現在では、「レイシストしばき隊」を自称する反対勢力がネット上に表れ、在特会の運動と衝突を引き起こすなど、事態は更に複雑化の様相を呈している。国内世論の右傾化が叫ばれ、それに伴って新たな「イデオロギーの衝突」が顕在的な問題となりつつある中、「ネット右翼」の存在を改めて現実的な問題として取り上げる事は有意義であると言えるだろう。

一方で、本書は在特会とオンラインにおける「ネット右翼」の関連性を前提としているものの、在特会とオンラインにおけるネット右翼との決定的な相関性を明確化するまでには至っていない。確かに在特会とネット右翼の間にイデオロギー的な相似が多く確認される事は事実であり、在特会の現実社会における運動が、国内オンラインコミュニティにおける右傾化趣向に何らかの影響を及ぼしている事は想像に固くない。しかしながら、本著ではオンラインにおけるネット右翼とオフラインにおける在特会を完全にイコールで結びつける(i. e. 「ネット右翼」の正体が、在特会によるプロパガンダ活動の成果である)には至っておらず、本書の実際的なポタージュとしての内容からネットの右傾化傾向が在特会によって先導された現象である、或いは在特会がオンラインにおける極性的な右傾化現象が生み出した産物である、と結論づける事は難しい。これに関しては、オンラインにおける匿名性がコミュニティ内のコミュニケーションと現実社会における現象との相関性を極めて不明瞭にしてしまうため、ネットの現象を



現実の事象と結びつけるには限界があり、したがってあくまで概念的な存在の考察によって導かれた蓋然的な結論を出すに留める事しかできないのが現状である(この辺りが、ネットを利用したイデオロギー活動の巧妙さでもある)。実際に、ネット右翼的な愛国思想を持つ「ネット民」の中には在特会の非理性的な暴力的手法に対して批判的な声を上げる者もあれば、在特会がネット右翼の非合理性を公然と批判するような立場を示す事もある。このように、「オンラインコミュニティ」という言葉によって多様性を持った概念的総体をどのように粹引きするのかという課題は未だに残る。

また、同書は結論として在特会に帰属する党員のナショナリズム傾倒を「人との繋がり」といった心理的な所属欲求が目的化した現象である事を示唆しているが、そのような帰結には疑問が残る。確かに、ネットというメディアで組織された運動という特性を考えるに、オンラインでのコミュニケーションが、個々の「権威への挑戦」を目指すコミュニティ、およびナショナリスティックな活動によって「日本人」というアイデンティティへの帰属意識を満たし、結果的に各々の所属欲求を充足する装置として機能している側面は否めず、一般的な結論の落とし所としては非常に納得しやすいものであるように思われる。しかしながら、オンラインコミュニティに対する大衆的なステレオタイプから、同現象を単純なある一部の「無産階級」によって行われる所属欲求の充足を目的とした運動であると結論づけてしまうのは早計である。ネット右翼が持つ際立った排他的民族主義性は、戦後の「日本人」という帰属意識の中に存在し続けてきた民族問題への葛藤、および「日本人」というアイデンティティに内在し続けてきたナショナリズムが、オンラインのコミュニケーションの中で表面化し、同じ「日本人」のアイデンティティを持つ者との閉じられた交流の中で極性化した現象であるとされるほうが自然であろう。従って、本書が提示する問題は「日本人」というナショナリズムの根底的問題に依拠し、その本質を議論するためには

同現象に対するより文化的・社会的な視点からの考察が必要となる。

オンラインコミュニティを取り巻く情勢に関しては、本著のようにジャーナリストを中心とした「ネット論壇者」による実際の考察が圧倒的多数となり国内の「インターネット論」を先導してきた。しかしながら、その質は実に玉石混交である。領土問題を始めとした諸隣国とのナショナリズムの衝突が顕在化する中、ネット右翼によって育まれ、および在特会が保持するような極性的ナショナリズムの存在は、もはやニッチな世界の出来事であると切り離す事はできないだろう。オンラインコミュニティにおける右傾化の実像を解明し、それを現実社会における「右傾化」と結びつけた形で解釈を与えるためには、よりアカデミックな視点からの理論的分析が求められる。

村井 秀輔

(2013年4月より明治大学院生)

トッド・ギトリン著『アメリカの文化戦争—たそがれゆく共通の夢』（足田三良、向井俊二訳、樋口映美解説、2001年）彩流社 [Todd Gitlin. (1996). *The twilight of common dreams: Why America is wracked by culture wars*. Henry Holt & Co, NY.]

本書の主題は、アメリカはどのようにして連帯が可能かを考察することにある。つまり、1980年代以降、社会的マイノリティがアイデンティティに基づく政治を繰り広げた社会的状況を「分裂」と捉え、そこから「連帯」を達成するために「理性」に頼るべきだとするのが本書の主張である。

本書はアイデンティティそのものについて議論しているのではなく、主題はアイデンティティ、アイデンティティに基づく政治が共同体の「連帯」とどのように折り合うべきかである。つまりそれらの関係性を問いにしたのが本書である。ここでは著者が「アイデンティティ」と「共同体」をそれぞれどのように定義付けているのか、その記述の方法を考察し、その関係性の記述がどのような作用を生み出しているのかを考察してみたい。

本書においてアイデンティティ・ポリティクスは批判の対象である。なぜならそれは共同体の「連帯」にとって障壁となるからである。著者によればマイノリティのアイデンティティ・ポリティクスとは私的利益の追求行為であり、際限ない分裂と単一文化を生む排他的な政治行為である。したがって、「連帯」を標榜する著者にとってアイデンティティ・ポリティクスとは捨て去るべき対象である。

著者がアイデンティティ・ポリティクスの代わりに標榜するのは「理性」である。奴隷制度や人種制度等の歴史的背景なしにアイデンティティ・ポリティクスを捉えることはできないことは著者も指摘しているが、そのようなネガティブな歴史は民主主義によって「乗り越える」べきであるとする。つまり、「分裂」という社会的状況を「超越」し「理性的」に対話することで、「アメリカ共通の夢」すなわち「連帯」へと向かうことができるとする。

しかし「理性」による「連帯」の内実は明確ではない。著者はアメリカが植民地化によって誕生したことに触れつつ、「独立宣言前／後」を分離し、「独立宣言後」のアメリカの共同体のあり方を模索する。著者がアメリカに共通の民族性、歴史認識が存在せず「アメリカ人のアイデンティティ」そのものが不在であるとしている点からも、理想のアメリカに「独立宣言前」が含まれていないことがわかる。「連帯」を模索する際、著者は常に「独立宣言」が理想とするアメリカに回帰することになるが、それは植民地支配という歴史的な文脈を排除した上で達成されるものであることにされているため、予め時間的、空間的な制約を孕んだ上で、抽象化されている。

「連帯」を抽象化することで生じる弊害は、共同体が結局は植民地支配という歴史的な文脈や民族性を排除した上で成り立つことを容認してしまっている点である。歴史的な文脈を「理性」によって「乗り越える」ことが可能であるとする視座に立てば、まさにマイノリティのアイデンティティ・ポリティクスは私的利益の追求に過ぎないと映る。

また、「共通の夢」が歴史的な文脈を排して達成されるとする視点では、「理性」によってもたらされる「連帯」の達成方法も抽象化される。著者は多様性を乗り越え「連帯」するために互いが互いの言葉に耳を貸す「共通の広場」が必要であると説くが、極めて抽象的である。また「理性による超越」という問題解決の手段は、マイノリティにとっては発言を封じ込める手段として機能する。したがって、「分裂状態から理性を用いた連帯へ」という論旨によって苦境に立たされるのはマイノリティである。

本書から明らかになるのは、「連帯」そのものが特定の立場によって標榜されたものに過ぎないということである。「アメリカはいかに連帯可能か」という問いは、「なぜアメリカは連帯しなければならないか」という問いによって応戦される可能性は大にある。また「アメリカにとって連帯とは何か」、「アメリカとは何か」という反論も考えられる。つまり、アイデンティティ・ポリティクスを「連帯」にとっ

ての障壁として捉える視座そのものが、誰の利益を代弁しているのかを問う必要性が明らかとなってくる。本書においては、アメリカにおける「連帯」を考える上で、独立宣言前の歴史的な文脈やマイノリティの主張を考慮せず、啓蒙主義的に「理性」による解決が図られようとしている点が問題として指摘できるだろう。

しかしアイデンティティについて、その本質化、固定化を避け共同体との関係性において捉えている点は興味深い。その意味で、本書は示唆的な論点を呈示していると言えるだろう。

高橋芽惟（静岡県立大学院生）

クリストファー・スモール著『ミュージッキング 音楽は〈行為〉である』（野沢豊一・西島千尋訳、2011年）水声社 [Christopher Small.(1998). *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*. Middletown, CT: Wesleyan University Press.]

本書は、クリストファー・スモールによる1998年の著作の日本語訳である。彼は、音楽教育に携わり、動物学を専攻していたり、作曲なども手掛けたりした経歴をもつ。また、社会学やカルチュラル・スタディーズ、音楽学といった多様な領域の研究者と交流があり、本書は伝統的な音楽学から民族音楽学、音楽教育といった様々な分野から注目を受けた。彼の経歴や、分野の多様性からも、本書が領域横断的に「音楽」を考える視点についての影響を及ぼしたことが分かる。

本書におけるスモールの主張を要約するならば、音楽などという「もの」ではなく、彼がミュージッキング (musicking) ということばで説明するような「行為」である、ということである。ミュージッキングとは、「音楽する (to music)」の名詞形であり、「どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加すること」である。ミュージッキングということばは、演奏すること、聴くこと、そしてリハーサルや練習、作曲やダンスまでも含む。さらには、コンサートというできごとを可能にするチケット売りや会場の掃除人など、音楽パフォーマンスに貢献する人全てを含む。ここで彼は、音楽を「もの」ではなくて、「特別に組織された音を通して行なわれる人間同士の出会いとして見よう」としている (30-33 頁)。ミュージッキングは、「私たちが、自分たち自身について、私たちと他者との関係について、また、私たちと地球上の生き物との結びつきについて理解するためには欠かせない (37-38 頁)」のである。ここでスモールは、音楽は、これまで考えられてきたような対象化されたひとつの「もの」ではなく、さまざまな人びとや人と人同士の関係を可能にするための「行為」であると考えている。

このようなスモールの立場は、自律性をもつ「音楽作品」を前提とした近代的な音楽概念への批判を含む。スモールによると、そのような対象化された「音楽」概念からは、4つの誤った命題が導き出される。1つ目に、音楽パフォーマンスは自律的な作品にとってたんなる媒介にすぎず、それ自体は創造的な過程に寄与しない。2つ目に、音楽パフォーマンスは作曲家から演奏家を介して個人へと届く、一方的なコミュニケーションである。3つ目に、作品に勝るパフォーマンスは無い。そして最後に、音楽作品はそれ自体自律的である、ということである(24-27頁)。彼は、西洋の近代的な芸術観が作り上げたこのような「音楽」概念を乗り越えることを試み、ミュージッキングという語を用いて、その行為としての側面を前景化させる。そして本書の多くのページが、コンサート・ホールという場と人びとの関係とに着目しながら、西洋クラシック音楽のコンサートを、ミュージッキングとして詳細に記述することに割り当てられている。

スモールは、ミュージッキングによって可能になる人びとの関係性を、パフォーマンスの重要な意味であると考え。彼によると、ミュージッキングに参加する人びとが互いにどのように関わるかが、自分たちがパフォーマンス空間の外の世界とどう関わるか、ということに関係している(102頁)。例えば、クラシックのコンサートの観客、ロック・コンサートやフォーク音楽のフェスティバルには、それぞれにどのような態度がふさわしいか、どのようにお互い振舞うのが一番心地よいか、という共同体の想像する「理想」がある。これは、実際そうであるというよりは、「そうあって欲しいと望んだり、経験したいと切望したりする関係」である。ミュージッキングは、スモールのことばで言えば、「自分たちの価値観」を「確認し、探求し、祝うための儀式」なのである(343-347頁)。

本書は、それまでの作品解釈や作曲者のみに音楽を還元してしまう視点を乗り越えようとしている。スモールのミュージッキング概念は、音楽を「対象」

ではなく「行為」として考えることで、音楽の意味が作品にもともと備わっているものではなく、ミュージッキングに関わる人びとの聴取によって、その時・その場で生まれることを示唆した。

その一方で、限界もまた指摘されている。中村美亜は、スモールの『ミュージッキング』がもたらした議論や評価をまとめながら、『ミュージッキング』がもつ問題点を3つに分類する(中村美亜「〈音楽する〉とはどういうことか?——多文化社会における音楽文化の意義を考えるための予備的考察——」『電子版 音楽学部紀要』第36集(東京藝術大学、2010年))。彼女によれば、1つ目に、ミュージッキングの議論には、音楽する人間の「身体」に関する議論が欠けている。2つ目に、スモールの議論は、ミュージッキングの行為的な側面を強調するあまり、音楽的テキストを軽視しているように見える。そして3つ目に、『ミュージッキング』においては、彼が共同体の「理想」と呼ぶミュージッキングが可能にする関係が、変容する可能性を見落としている。以下では、特にコミュニケーションという観点にとって重要だと思われる3つ目の点について考える。

ミュージッキングにおいて可能になる人と人との関係が重要であると考えれば、人と人との関係が作られ、強化されるだけではなく、変化したり元の関係に異議を申し立てたりする可能性があってもいいはずである。前述の中村は、このような議論がスモールに欠けていると論じているが、スモールは、ミュージッキングによって人と人との関係が変化することを排除していないように見える。彼は、シンフォニー・コンサートの記述を行うにあたって、彼が西洋クラシックを愛する一方で、大規模なコンサートでのほんの少しの「騒音」も許されないような環境に居心地の悪さを感じてきたことを明かしている。そして、そのような「アンビヴァレントな」思いこそが、彼の問いを誘発したとも述べる(41-42頁)。スモールは、本書の大部分で行われるシンフォニー・コンサートの記述によって、現在のシンフォニー・コンサートの「理想」に少し居心地の悪さを覚

える一人として、そこに新たな解釈を見出そうとしているのである。この点では、中村が「コンサートが新たな意味を生み出す可能性も有していることにも言及すべきだった」と批判したことに、スモールは応じていると考えることができる。彼は、ミュージックの新たな「読み」によって、そこに別の関係が生まれる可能性を見ていたのではないだろうか。

スモールがミュージックということばで表そうとした広汎なできごとは、人びとが現在取り結ぶ関係を強化することもあるし、逆にその場で創り出したり、変容させていくこともある。「対象」としての「音楽」ではなく、「行為」としてのミュージックに着目することは、「いま—ここ」で生起する音にこそ音楽の意味を見出そうとする試みである。そしてその瞬間にこそ、人と人とが関係し、変化していく可能性があるのである。

渡辺 友穂（静岡県立大学院生）

バー・V 著『社会的構築主義への招待：言説分析とは何か』（田中一彦訳、1997年）川島書店[Burr V. (1995). *An introduction to social constructionism*. London: Routledge.]

社会的構築主義に関する優れた書籍は数多く存在するが、それらの多くは研究者によって他の研究者に向けて書かれたものであり、難解であった。そこでヴィヴィアン・バーは、これから社会的構築主義の考え方に触れようとしている一般の学生の要求を満たすことを目的として本書を書いている。彼女が見せる社会的構築主義という比較的新しい学際領域における立場は概して支持者としてのもののだが、しかしながら彼女は無批判な支持者であるという訳ではない。社会的構築主義が持つ弱点や欠点、ひいては解決されるべき多くの問題についてもなるべく具体的な事例を示して触れることをしており、この分野に対して彼女自身による再帰的な眼差しが向けられている。本書における具体的な事例は彼女が身を置くイギリスで見られるものが多いので、ある程度の偏りがあると言わざるを得ないのだが、それでもこれから社会的構築主義の分野に足を踏み入れようとしている学生にとってはバランスの取れた良質な入門書として受け入れられるだろう。

本書の構成としては、社会的構築主義の概説として、その定義を探ることやこの領域に含める研究者や著作を彼女自身のフィルターを通して選別し、また社会的構築主義の誕生の歴史的背景やこの分野における問題などを提起することから始めている。当たり前とされることにまず疑いを持つ社会的構築主義の性格を鑑みて、その疑いの目を向ける対象として、現代においてはその個人差・恒常性・統一性が受け入れられている「パーソナリティ」という素材を彼女は選択しており、そして、「パーソナリティ」を構築する上で社会的構築主義の分野においては重要とされる「言語」観の話題に論の構成を繋げている。

次に本書の内容としては人間が持つ「パーソナリ

ティ」が「言語」によって構築されるという話題に触れることを通して、「言語」が体制化された状態である「言説」に話題を転じている。「言説」について考える上ではそれを行使する者達が持つ「権力」や、「言説」が持つ「遂行的性格」の話題を避けて通ることは出来ず、その為に彼女はフーコーの考える「権力」に思考を巡らし、「言説」についての深い考察を本書において読者に示している。

「言説」が「パーソナリティ」を始めとした人間にとっては不可分の世界の構築に寄与しているのだとしたら、「言説」の外に実在世界は存在するのかという問題が提起されてくる訳だが、その点に関して彼女は「イデオロギー」という概念に触れることでこの問いに答えようとしている。

「言説」に構築されるということは、そこには人間の立場として、それを使用する者、言語によって構築された自己、そして自己の主体の立場はどのような様相を描き出すものであるのかという問題の提起に繋がる訳であるが、そのことは「言説」に絡め取られる諸個人が社会を変える為には如何なる方策があるのかを探ることが重要であるとする彼女の抱く考えに関係している。以上これまで述べてきた本書の内容について、それぞれについてこれからもう少し詳しく解説してみたい。

そもそも「社会的構築主義」なるものに明確な定義など存在するのだろうか。バーによればその答えは「否」となる。社会的構築主義者と呼ばれる研究者達を繋ぎ止めるものは彼女の表現を借りれば「家族的類似性」となり、そしてこれが彼女の採用するモデルとなる。家族を例として彼女はこのモデルの説明をしているが、家族成員は全員が共通の特徴を有している訳ではない。しかし「〇〇家特有の〇〇」の様に、その成員が同じ家族集団に属しているだろうと認定させるに十分なだけの特徴を持つことはある。社会的構築主義においてもまた、このパースペクティブを採用する全ての研究者や著作の全てが共通の特徴を持っている訳ではないのだが、バーによれば次の様な鍵となる諸仮定のうち一つ、あるいは

それ以上を有していれば大まかにそれは社会的構築主義の範疇に収めることが出来るとしている。

彼女の挙げる諸仮定は4つある。まず「自明の知識への批判的スタンス」、つまりはわれわれ人間が日頃は当たり前としている物事に対する見方やそれに伴う知識の在り方など、人間が持つ物事に向ける自明の仕方に対して疑いを持つことが一つの仮定となる。当たり前としているわれわれの見方には、例えば「子供」観などがあげられるが、「子供」という表現の意味するところの変遷を追えば、かつては「子供」はアリエスが言う様に「小さな大人」として見られていた時代があり、近代におけるものとは異なる。つまりは、われわれが持つカテゴリーの仕方およびその意味の歴史的・文化的な特殊性にも目を向けることが第二の社会的構築主義における仮定となるのだ。知識の意味、あるいは語が意味するものの影響を受けてそれを知識として用いるに至るまでには、語の意味が可変的であるという問題を孕んでおり、なぜそうした変化が生まれるということに関しては、それは知識が社会的過程によって支えられているということに関係してくる。知識、つまりは人間が持つ理解の仕方はあらゆる種類の人と人との間における相互作用を通じて生み出されるものであり、それは決して固定的・恒常的なものではないのだ。そして、知識が生み出されるに至る過程には人と人との相互作用が前提としてあること、つまりは知識には相互作用を生み出す為の社会的行為が伴うという性質を持つことが最後の仮定として挙げられる。社会的行為無しには社会的相互作用も生まれず、知識の生産も生まれない。以上こうした4つの諸仮定が社会的構築主義をわれわれの世界の中で同定する上では重要なものとなってくる。

こうした諸仮定を前提とする社会的構築主義は殆どの伝統的な心理学とは対照をなすとバーはしている。なぜなら、伝統的な心理学においては人間の内部には何か「本質的」な「中身」が隠されており、それが人間を人間として支える上では発見されるべきものであるとする立場を採用しているからであり、

またそうした発見されるべき何か「本質的」なもの  
は「実在」するという見方をしてきたからである。  
社会的構築主義においては、人間自身を含む社会的  
世界は、社会的過程の生み出すもの、つまりは未だ  
以て進行中の「プロセス」として捉えられているの  
で、静的で恒久的で一定な人間の「中身」は「実在」  
しないことになる。なぜこうした疑問が生まれるか  
というと、それは伝統的な心理学における「パーソ  
ナリティ」の見方に弱点があるからだ。例えば目に見  
えない「パーソナリティ」というものを人はどの  
様に確信を以て説明することが出来るのか、あるい  
は証明出来るのかという問題、「パーソナリティ」を  
巡る文化差・時代差の問題などが挙げられる。つま  
り、可視的な在り方で「パーソナリティ」の説明を  
することも全ての人類に共通の恒久的・普遍的な「パ  
ーソナリティ」の証明をすることも伝統的心理学の  
見方によっては叶わないのである。

こうした伝統的心理学が孕む問題に対して、社会  
的構築主義においては人間でさえも一つの「プロセ  
ス」として捉えることになる。伝統的心理学におい  
てはわれわれの「パーソナリティ」は「本質的」な  
性質を持つものとして、またそれは「実在」するも  
のとして捉えられてきた訳であるが、そうした見方  
に社会的構築主義は疑問を呈する。「パーソナリテ  
ィ」における「本質性」「実在性」を否定し、「プロ  
セス」の下に置かれる「構築物」として社会的構築  
主義はそれの「パターン」を探ることを目指す訳だ  
が、ではその仕方はどの様なものであるのだろうか。  
この仕方に説明を果たす為、社会的構築主義者は「言  
語」に注目する。なぜなら、「パーソナリティ」を巡  
る「プロセス」を生み出す上で必要となってくるの  
が、人と人との相互作用に大きな働きを持つ「言語」  
となるからである。

言語と人の関係の常識的な見方は、前者が後者を  
表現する手段と見る。言語がどの様に世界を分節化  
し、表現するかによって、その内的構造が人を構築  
する仕方に大きな影響を及ぼすという見方が伝統的  
であった。しかし、ポスト構造主義以降は、そうし

た見方に大きな変化が見られる様になった。言語と  
いう「記号」が持つ機能については、ソシュールが  
「能記(意味するもの)」と「所記(意味されるもの)」  
という概念を用いて説明をしているが、両者におけ  
る結びつきは恣意的なものであることが知られてい  
る。つまり、「言語」によって人の構築を説明しよう  
としても、「言語」という「記号」が内包する意味の  
働きが恣意的なもの、あるいは変化の余地を残すも  
のであるとするならば、「言語」による「人」の構築  
の仕方も恣意的であり、一定の安定したものではな  
いということになる。こうした問題に目を向けたの  
がポスト構造主義者達であった。すなわち、「言語」  
の持つ意味が固定したものではなく、絶えず疑問に  
さらされており、いつでも議論の余地があるものと  
するならば、「言語」による人の「構築」もまた、「言  
語」に向けられるのと同じ立場にあるということに  
なる。この様にポスト構造主義においては、「言語」  
に一定の意味を与えないという立場を採用すること  
になるのだが、それは次の様な問題を提起すること  
に繋がる。「言語」が誰もが一致する固定した意味を  
持つ記号系であるとする前提を疑うとするなら、そ  
こには常に「言語」の意味に関する変化、不一致、  
潜在的な葛藤のトポスが存在することになり、また  
そうした葛藤について語る時は常に「権力」関係を  
扱うのは避けられないだろうという問題である。本  
書においてバーはこの「言語」と「権力」の関係を、  
前者を「言語」が構造化された仕方である「言説」  
に置き換えて言及している。

「言説」とはパーカーによれば「対象を構築する  
陳述の体系」であり、それは何らかの仕方でまとま  
って、出来事の特定のバージョンを生み出す一群の  
意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、  
陳述等々を指している。また「言説」によってある  
対象に関して描写されるということは、遂行される  
「言説」によってその対象が見せるバージョンも多  
数の代替可能なものとなり、世界にそれを表現する  
仕方に一つの固定したものではなくなるということ  
になる。

「言説」が遂行される場においては、「権力」との関係に言及することを避ける訳にはいかない。なぜなら、「言説」によってはそれが社会構造や社会的慣行の影響を受けて、ある特定の相対的に権力を持つとされる一群の人々によって行使され、そうした人々が行使する「言説」によって表象される対象の人々の像が歪められることがあり、利害関係が生じる可能性があるからである。つまり、「言説」は「権力関係」に埋め込まれていることになるのだが、本書においては両者における関係性についてフーコーの考えを参考にしながら説明を行っている。特定の「言説」を人々の間で流布している一つの「知」として捉えるならば、その「知」が人々によって疑われることなく受け入れられ、その「知」がある時代における常識的な見方を形成しているのだとしたら、それは「権力」と関係していると彼は説いている。つまり、出来事のバージョンを決める特定の行為の仕方や資源の要求の在り方、またそれらをコントロールすることは、社会に広く流布している「知」の在り方によって決まり、そうした「知」を行使出来る「権力」はその時代に人々によって「権力」を持つ者として受け入れられる人々の掌中にあるということになる。また、そうした「権力」を持つ者と持たない者を二分するものが「言説」であるとフーコーは述べている。世界や人を定義することは、「権力」を行使することに他ならないのだが、われわれがある物事を特定の仕方と定義ないし表現する時には、われわれは「権力」をもたらす特定の「知」を作り出すという行為に寄与していることになるのだ。フーコーにとって、「知」とは他者への「権力」、つまり他者を定義する「権力」なのである。では、特定の「権力」を持つ者達による「言説」の行使によって定義されている人々が、その定義に留まり続けるしか他ないのかというと、そうではない。なぜなら、「権力」あるところには必ず「抵抗」があるからだ。そして、ここに、特定の「言説」によって表象されることで周縁化される人々に変化の可能性を残す鍵があると言える。

社会的構築主義の視座によれば出来事に「実在」はないということになるのだが、代わって諸言説が上記のような「権力」を覆い隠す為に用いられるのが「イデオロギー」ということになる。そしてこの「イデオロギー」というものが、アルチュセールによれば、人々に「呼びかけ」、諸個人が「言説」に絡め取られ言われなき表象をされている人々にとっての「主体」の立場を決めるとされる。よって、諸個人が社会において自らを変える力を持つことの成否は、彼らに「呼びかけ」を行う「イデオロギー」の質に大きく左右されることになると言えるだろう。「イデオロギー」は概して「権力」を持つ者達にとって有用に機能するのだが、しかし社会的構築主義の見方によれば、「イデオロギー」とは容易な答えの存在しない両面的な問いというジレンマを常に孕むものとして捉えており、そこに言われなき「言説」による表象によって周縁化された人々にとっての自己にとっての有用な主体の立場取りの可能性が残されることになる。そして、こうした諸個人によって社会を変えることが出来るかという問いに立つことは、次のことを考えなければならなくなる。すなわち、その変化が社会→個人の「トップ・ダウン」なのか、個人→社会の「ボトム・アップ」であるのか、あるいはこうした「個人」「社会」という二分法そのものをやめるべきなのかという問題である。

本書においては個人の力の問題を扱い、社会的構築主義の枠組の中で個人を自分自身や社会的環境を変えるものが出来るものとして如何に考えることが出来るかを問いかけている。なぜこうした問いが生じるかと言えば、それは社会的構築主義においては人を言説の所産として見る見方があるということと関係している。人が言説の所産であるという見方は、つまり、われわれの社会を形作る諸言説というものは、人をそうした諸言説に基づいて統一的な見方としてパッケージ化し構築しているという状況があるからなのだが、そのことは必然的に個人と社会と言説との関係までを扱う必要性を生じさせる。「個人」は「言説」に満たされる「社会」の中で生きており、



そうした状況の中で如何にして自己の変革を達成するかは、こうした三項の関係について問い直さなければならないのである。なぜなら、もしも人々が「言説」を通じて自分の生活や世界を経験する、その諸言説自体が社会的諸構造の所産であるとする、世界に何らかの変化を生み出すためには、われわれはそれらの構造が生み出す諸言説ではなく、それらの構造こそを標的にしなければならないからである。こうした必要の要請は、帰結として「個人」と「社会」の問題をどの様に理解するのかという問いに達する。従来の社会諸科学においては、「個人」と「社会」の関係における影響の方向性、すなわち「個人」が「社会」を決定するのか（ボトム・アップ）、それとも「社会」が「個人」を決定するのか（トップ・ダウン）というテーマを主としてきた。本書における立場は「ボトム・アップ」の見方に注目を置き、如何にして「個人」による「社会」の変化が可能であるのかについて言及をしているのだが、しかし、ここでこうした問いに立つ前段階として、そもそも「個人」と「社会」という二分法的な括りの仕方が適切であるのかという所に社会的構築主義の疑問は投げかけられている。すなわち、「個人」と「社会」の二分法に代わるものの探索が為されているのだが、そこで彼女はデリダの「脱構築」の考え方を参考にしながら、これに一つの回答を示そうとしている。

デリダによる「脱構築」の考えによれば、語の様な能記は他の能記からその意味を得るに過ぎない。例えば「高木」という能記の意味を得ようとするならば、「高木」でないものの能記から意味を得ることしか出来ない。「暗さ」の語の意味は「明るさ」の欠如として考える様に、語の意味は常に能記の他の能記からの差異に依存していると同時に、その連鎖の中で、一つの能記からもう一つの能記へと絶えず延期されているのだ（こうした特徴を示すのにデリダは「差延」というフランス語を使う）。従って、「個人」という能記が意味を得るのはその欠如の要素である「社会」という能記との差異によってでしかないのであるが、本書においてはそうした二分法によ

る「個人」と「社会」の捉え方を超えて、その関係を理解する為に可能な一つのモデルを示すことをしている。すなわち、そのモデルは二者双方を分けるのではなく、「二者双方とも」という論理に基づき、「生態系」というベイトソンの捉え方に依拠することが出来るのではないかとバーは言及している。「個人」と「社会」が不可分のものであるとするなら、そこでは「個人」が変われば「社会」が変わるという「ボトム・アップ」の論理が可能となる訳である。

こうして「個人」の変化による「社会」の変化の論理を成り立たせる為に、バーは両者双方を含む「生態系」のシステムという考えを採用するに至るのであるが、そうした変化を起こす上での「言説」と「個人」の関係は如何なるものであるか、あるいはそうした関係性における「個人」とは「人である」ということの意味において如何なる存在として捉えることが出来るのか、本書においては三つの側面からこの点について言及されている。それらは「言説使用者」としての個人、「言語で構築された自己」としての個人、また「言説における主体の立場」という点である。

「言語」には遂行的な性格があることは例えばオースティンの「発話行為」理論などに知られるが、こうした性格を持つ「言語」あるいは「言説」を諸個人は日々の営みの中で行使している。そして、「言語」による行使を人々が行う上では、ポッターとウェザエルの唱える「解釈レパトリー」という概念が用いられている。これは人々が出来事に関する説明を行う上で利用する言語的資源の一種となる訳だが、この「解釈レパトリー」の質によって、それを用いて説明される「社会」は異なる様相を見せるということになる。

如何なる「解釈レパトリー」が用いられることが望ましいかについては本書において触れられていないが、この概念の道具様式が「個人」が「社会」を変える上では大きな役割を果たすという点がバーの考えに基づき述べられている。

「言語」はわれわれにとって使用することの出来

る道具的一式であるのだが、裏を返せばそれが世界の出来事を説明する力を持つものである以上、その世界に住むわれわれ人間もまた「言語」によって説明される対象であることになる訳だが、その意味で「言語で構築された自己」という側面に触れる必要が生まれてくる。本書においてはその説明のされ方はハレが考える様に言語の内的論理あるいは文法にあるとする考えと、サービン、あるいはガーゲンによって代表される考えの様に、われわれの個人的歴史とアイデンティティの感覚は文化的に使える物語の諸形式から生じるものと捉える考えに触れている。

「個人」の自己の構築にはこうした二つの見方が存在することに本書では言及しているのだが、なぜそれが成されたかという点については、言語が「個人」の主体性の形成に如何なるアプローチで寄与しているのかを、そうしたアプローチにより如何なる「個人」の諸バージョンが生じるのか、その有効な方法について相対化することが重要であったからである。

「言語」が構造化された「言説」が行使されることで、「個人」はその使用者として、またその表現の対象として二つの立場を「言語」に対して取ることになる。そして、「個人」が「社会」の構築の在り方に変化を求めるのだとするならば、そうした「言語」に対する「個人」が持つアンビバレントな主体としての立場を如何に望ましいものとするのが重要となってくるのであろう。

ここまで、社会的構築主義とは如何なるものであり、それを考える為に「パーソナリティ」の話題に触れ、この領域における「言語」観、そして「言語」が構造化された「言説」と「権力」の関係、また「個人」と「社会」との関係およびその変化の可能性、そしてそうした変化を望む上での「個人」と「言語」の関係などについて見てきた。最後に本書の書評を閉じるにあたってまとめを一言述べるならば、社会的構築主義は現在多様な学問分野へと派生し比較的新しい学際的な分野として知られるに至った訳であるのだが、本書の冒頭でも述べた様に、社会的構築主義が当たり前の物事に対して常に疑いの眼差しを

向けると同時に、そうした眼差しはまた自らにも向けられているのだということに自覚的であって欲しいということである。他者を眼差すということは、その見つめる先には自己に向けられる眼差しも存在するということである。これから先、社会的構築主義は学の間においてますます注目を浴びる趨勢な力となっていくことだろう。しかし、そうした状況に驕ることなく、常に自らに対しても批判的であり続けること、それが未だ社会的構築主義が抱える弱点であり欠点を越えて、更なる高みへと辿り着く為の唯一の方法である様に感じるのだ。

中山 佑介（立教大学院生）